

上記履歴書に書かれているように、ベルリンで文部省副学務局長だった福原隼二郎はじめ、多くの日本人に独語を教えた経験のあるビュットナー女史に白羽の矢が立ったのであろう。ここは、学歴より彼女の語学教師としての能力を見込んで採用した当時の七高校長岩崎行親と五高校長松浦寅三郎の英断を讃えるべきだろう。それまでの功績が認められたせいも、明治44年(1911)12月には奏任に準ずる身分取り扱いとなった。外国の女性教師がそうした称号を与えられることは珍しかった。さらに大正元年8月1日より同4年(1915)7月31日まで傭継続となり(この時松浦校長と交わした11カ条の詳細な契約書が残されている)、彼女の方も期待に応え五高では授業のほか、『龍南会雑誌』への寄稿、瑞邦館での外国語演説会への参加など熱心だった。大正3年12月には奏任5等以上に準じる身分取り扱いとなったが、当時第一次大戦が勃発し日独は敵国として戦争中だっただけに、これは驚きだ。五高当局が彼女の勤務態度と貢献度を評価したためだろう。寺田勇吉の心配は全くの杞憂だった。帰国旅費(675円)も契約通り支払われた。ナホッドの日本書誌によると、ビュットナーは帰国した1915年と、16年に自身の日本体験に基づく論文2篇を発表した。その後まもなくして彼女は世を去ったと推定される。

S・ビュットナーの見た七高と五高

女性の独語教師として日本の高等学校に最初に招聘され、七高造士館と五高で6年間教えたゾフィー・ビュットナーについては、以前本欄で取り上げたが、その後、帰国後彼女が書いた「日本の高等学校」(Japanische Hochschulen)〈Kotogakko〉(1916)と題する新資料を入手したので紹介したい。

ビュットナーは来日前はベルリンで日本からの留学生にドイツ語を教えていた。(その中には文部省副学務局長福原隼二郎、同参事官田所美治、国文学者芳賀矢一、地理学者山崎直方などもいた。)ところが或る日突然、日本の文部省から鹿児島第七高等学校に独語教師として赴任しないかと文書で問い合わせがあった。そこには学校や仕事の内容についての詳しい記載はなく、日本の高等学校は大学への予備の学校として重要なもので、従ってそこ雇われている教師の地位は大変高く、尊敬されるということが強調されていた。だが同時に女性には不愉快なこともあるだろうし、孤独を感じることも覚悟してほしい。高等学校に女性教師を雇うのは初めてで、実験的な意味もあると書かれてあった。これだけでは日本の高校の具体的にはイメージは湧かなかったが、ビュットナーは長年ベルリンで日本人を教えた経験から、日本人はドイツ語を必要としていることは分かっていたので、直ちに招聘に応じることに決めた。そして1907年(明治40)8月、日本へ向かった。

日本に着いてみると、好奇の目で見られ、ホテルには新聞記者達が通訳を連れて押し掛け、質問責めにあつた。鹿児島へ向かう車中や船中でも、似たような質問をさんざん受けた。途中の都市ではベルリンで教えたかつての教え子達から熱烈に迎えられた。大阪から小さな汽船に乗って桜島に囲まれた鹿児島港に着くと、校長と教授達に温かく迎えられた。

鹿兒島に着いたのは9月28日の暑い日だった。2日休養した後、10月1日七高で盛大な歓迎式典あがった。岩崎校長が緊張した表情で登壇し、ビュットナーを七高生たちに紹介した。彼らは初めてドイツ女性を見たのである。校長は挨拶の中で、彼女は日本の若者達にドイツ語を教えるために遠いドイツから、親兄弟と別れて来日したことを強調した。生徒達はその言葉に感銘を受けたようだった。次いでビュットナーは就任の挨拶を述べ、外国語を学ぶことの大切さを訴えた。翌日から授業が始まった。最初のうちは日本人の教授が彼女を全ての教室へ案内し、授業を傍聴して、生徒が静かに授業を受けているか見守っていた。授業に関して学校側から彼女に対して指示といったものはなく、本人の自由に任された。全ての教師はそれぞれ義務と良心に基づいて授業をするものだという原則が行き渡っていた。時々、文部省から視学官が訪れ、授業を視察した。授業中に音もなくドアが開いて、校長が視学官、教務部長、数人の教授を伴って教室に入ってくる。そして黙って授業を観察する。生徒達には特に戸惑いは見られない。他校の校長や文部省の役人がしばしば訪問するから慣れていたのである。視学官が教師の授業や生徒達の勉強態度に満足したかどうかは分からない。それは秘密なのだ。そして学年末になって文部省から奏任官の称号を受ける教師が出てくる。ビュットナーもその称号を受けた。

高等学校は国立なので、重要な事項は全て文部省が決定する。そして全国の高等学校の校長が年一度東京に集まって協議する。

高等学校を創設の際は出来るだけ歴史的背景のある地が選ばれている。そして周囲の環境も美しく、手入れの行き届いた芝生と鬱蒼とした棕櫚の木に囲まれている。ドイツでは学校は大抵一つの校舎であるが、それに対して日本の高校は幾つかの建物から成り、それに大きな事務局が加わる。それ自体一つの小さい世界を成しており、大抵都市の郊外にある。本館には校長・教官棟、校舎、寮が含まれる。これに隣接して豊富な蔵書を誇る図書館がある。学生食堂もあり長テーブルで食事しているが、芝生に出て持参の弁当を食べるのを好むようだ。生徒は食事だけでなく、一般にとっても質素である。

大きな倉庫には銃や武具が保管されており、それらを用いて生徒達は11月になると近郊の村や町へ出かけ、8日間軍事教練を受ける。それに日頃から彼らは剣道と相撲で体を鍛えている。

式典や集会に使われる立派な講堂は独立した建物である。教員棟には教授達の共同の読書室と食堂が隣接している。購買部では各種の文房具が売られ、その横にはビュツフェがある。教員棟の2階にはかなり広いが質素な校長室と、共同の教員室があり、そこでは各教授が学校から支給された自分の机を持っている。周囲の壁には本棚があり、主に外国語辞書と参考図書が置いてある。この部屋にはいつもやかんにお湯が沸いている。日本人はお茶なくしては済まないのだ。朝から晩まで小さな湯飲みでお茶を啜っている。11月半ば頃には教員室に鉄製の2台のストーブが据えられ、教員達が休み時間にその周りに集まり暖を取っている。教室には暖房なんがなく、手足が冷え切っているのである。

寮も簡単な設備しかない。一階には生徒用の様々な勉強部屋があり、2階が寝室になっている。日本人は本当の寝室を持っていない。生徒達は、昼間は押入にに入れてある布団を夜になると出して、畳の上に敷き、木製の枕をして、綿入れの掛け布団を被って寝るのである。一部屋に8～10人が寝る。朝は冷たい井戸水で顔を洗い、あちこち歩きながら歯を磨いている。だが、

殆ど毎日共同湯に入っている。

ビュットナーによれば熊本の五高には約1000人の生徒と、45人の教師、数人の陸軍将校、それに英国人の教師が一人がいた。女性教師は唯一人彼女だけであった。以前は旧制高校には英人教師と独人教師がそれぞれ二人雇われていた。だが外国人教師はかなり高給で雇われていたので文部省は経費節減のために、現在ではその内一人は欧米で外国語を学んだ日本人教師を充てることにした。

授業は午前8時から12時まで、午後は1時から3時までであり、土曜は午前中で終わる。朝8時に鐘が鳴り、10分後にはラッパが授業開始の合図を告げる。すると教授達はゆっくりと教室へ向かう。それは高校でも15分ぐらい遅れて授業が始まるという *akademischer Viertel* の慣習があるからである。教師が教室に入ると、生徒達は坐ったまま黙礼する。教師は毎時間出席をとり、名前を呼ばれた生徒ははっきり「はい」と返事する。一般に授業は大学におけると同様で多くの教授は講義を行う。英語と独語については、会話、発音、書取、作文等は外国人教師が教え、文法と講読は日本人教師が担当する。日本人教師の授業は、我々ドイツ人から見ると、生徒は初めてドイツ語を学ぶのであり、且つ独語はとて難しい言語であることを思えば、速度が早すぎる。

一般的に日本の学生の水準はヨーロッパより低い。しかし彼らはあらゆる機会を捉えて学外でも語学の勉強をする。彼らは学校の休み時間に外国人教師に熱心に質問するし、その自宅を訪問して語学の練習をする。それでビュットナーは日曜の午後2時から4時までを面会時間に定めたが、1時に来て6時まで居続けた者もいた。

高校生の平均年齢は18～25歳であるが、しばしばそれ以上の者もいる。多くは既に結婚しているが、家族は勉学の間は実家に預けておく。日本の学生はまことに質素である。その部屋には低い勉強机が一つだけ、冬には小さな火鉢で手を暖めている。彼らの多くは教授や事務員のもとに下宿し、部屋代と食事代の代わりに家事を手伝い、庭仕事をし、お使いに行き、戸を開け、時には代筆をしたりする。また運のよい者は外国人教師や宣教師のもとに置いてもらい通訳の仕事をしながら英語や独語の会話の練習をする。

開学記念日には毎年祝典がある。五高では10月10日がそれに当たる。当日は三角旗と国旗で飾られた大講堂に式服を着た大勢の人が集まり、そこに千人の生徒達が入場し中央に整列する。演壇の左側には教官全員と事務官が座り、右側には熊本県知事、各学校の校長、熊本市の名士などの来賓が着席する。演壇の両側には高価な薩摩焼きの花瓶に菊の花が一杯に挿してあり、人目を引く。さらに武士道精神を忘れないために武具が置かれている。祝典は一同礼から始まる。まず校長の演説があり、次いで古参の教授が祝辞を述べ、さらに一人の生徒が話をする。それからオルガン伴奏で君が代が歌われる。それが終わると急いで床にゴザが敷かれ生徒達の剣道と柔道の模範演技がある。

午前中の式典は教授達に出される折り詰め弁当で終わる。午後1時から学校に隣接の運動場で運動会が開かれ、これには市民も見に来る。長距離競走、袋競走、スプーンレース、梯子乗りなどは人気がある。優勝者には校長から文房具やタオルが賞品として贈られる。

1月元旦と天皇誕生日には天皇皇后両陛下の写真（御真影）が数分べールを取られ、多くの人々の目に晒される。校長が豪華なカーテンを開けると、大佐のステントールのような大声を

合図に列席者は深々とお辞儀するのである。数分後にはカーテンは再び閉められ、校長は後ろ向きに演壇から降りる。

卒業式は卒業生が中心となって行われるが、教授達も招待される。長机には無数の茶瓶と色々なお菓子が並べられる。男子教職員が式場の一方の側に座り、それと向き合うように生徒達が着席する。そして互いに礼をして式が始まる。まず生徒代表が登壇し、長々と送別の辞と感謝の辞を述べる。その中では特に恩師達の授業振りが讃えられる。それに対して数人の教授が答辞を述べる。それが終わると、会場全体に、「さようなら」が響き渡る。

ビュットナーにとって6年間の日本の高等学校での教師生活の中で、特に印象深いことが二つあった。一つは七高時代に修学旅行で1週間かかって大阪商船の2隻の大きな汽船に乗って琉球へ行ったことである。もう一つは大正天皇がまだ皇太子の頃に鹿児島島の七高造士館を訪れたことである。天皇家は日本国民から半ば神と見なされており、旅行することは考えられなかったので、皇太子が薩摩藩主の居城の跡に建てられた造士館を訪問したことは、歴史的な事件として学校関係者には感銘を与えたのである。しかもこの時ビュットナーは同校に勤務する唯一の女性教師として皇太子に紹介される光栄に浴したのである。

やがて第一次大戦が勃発し日独は互いに敵国となったが、ビュットナーは日本に留まった。何も恐れることはなかったからだ。五高校長は戦争に関して感銘深い演説をし、生徒達に向かって強い調子で、全てのドイツ人に、特にビュットナー先生に対して親切に、礼儀正しく接するように注意した。彼の演説はビュットナーに深い印象として残った。また五高生も師が敵国に踏みとどまったことに感謝し、師の一族の者が出征していることに深い同情を示しているようだった。そして彼らは、ドイツ語を学ぶことは依然として必要だと考えていた。

ドイツ留学時代の長江藤次郎



長江藤次郎

五高ドイツ語教授長江藤次郎(1870-1934)は1909年(明治42)2月17日付で「独逸語研究ノ為」文部省より満2年間のドイツ留学を命じられた。ゲルマニストの文部省留学生としては山口小太郎、藤代禎輔、中村健一郎、田代光雄、澤井要一に次いで6番目であった。長江は大阪生まれで、第三高等中学校を経て、東大独文科に学び、卒業後は大学院に入り、戯曲論及びドイツ戯曲史を専攻した。その後学習院の嘱託教授や本郷元町の独逸語学校の講師を勤めたが、1899年(明治32)9月10日、山口高等学校教授に就任し独語を担当した。6年後、依願免本官となったが、この時履歴書(山口大学蔵)によると、多年山口高に勤務した慰勞として防長教育会より金時計一個と金千三百円を贈られている。1907年(明治40)1月に至り、今度は五高教授に就任した。そしてすぐに第五学科(独語)主任を命じられた。そこへ2年後の留学である。五高赴任に際して校長との間に留学に関して何らかの約束があったのではある